



TITLE:

Postcritically finite branched coverings の Julia 集合について(複素力学系とその関連分野)

AUTHOR(S):

亀山, 敦

CITATION:

亀山, 敦. Postcritically finite branched coverings の Julia 集合について(複素力学系とその関連分野). 数理解析研究所講究録 1997, 988: 29-34

ISSUE DATE:

1997-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/61056>

RIGHT:

Postcritically finite branched coverings の Julia 集合について

大阪大学基礎工学部 亀山敦 (Atsushi KAMEYAMA)

1 Introduction と定義

従来、Julia 集合は、リーマン球面上の有理関数に対して定義され、いろいろな性質が調べられて来ている。特に、postcritically finite と呼ばれる条件を満たす多項式の Julia 集合は、組合せ的な状況まで含めて、その構造がよくわかっている。しかし、この場合、Julia 集合の位相的な構造だけに着目したとき、多項式の解析的な性質は不必要となる。Julia 集合の位相は、homotopical な条件だけで決定されることがわかる。

本講演では、有理関数の解析的な性質を忘れ、topological な branched covering から出発して Julia 集合を定義し、その性質を調べていくことにする。

定義 2次元球面上の branched covering $f: S^2 \rightarrow S^2$ の critical point の集合を C_f と書き critical set と呼ぶ。また、 $P_f = \{f^k(c) | c \in C_f, k > 0\}$ を postcritical set と呼ぶ。 $\#P_f < \infty$ のとき、 f は postcritically finite であると言う。このとき、 $P_f = P_f^F \cup P_f^J$ とふたつに分かれる。 $P_f^F = \{x \in P_f | \text{ある } n \text{ について } f^n(x) \in C_f\}$ 、 $P_f^J = P_f - P_f^F$ である。 P_f^F に属する periodic cycle は critical point を含み、 P_f^J の periodic cycle はそうではない。有理関数の場合を考えると、Fatou 集合に含まれる postcritical point が P_f^F で Julia 集合に含まれるものが P_f^J 。

定義 二つの postcritically finite branched covering f, g が Thurston 同値であるとは、次をみたすような二つの同相写像 $\phi, \psi: (S^2, P_f) \rightarrow (S^2, P_g)$ が存在することである。 ϕ, ψ は P_f を止めて互いに isotopic であり、次が可換。

$$\begin{array}{ccc} (S^2, P_f) & \xrightarrow{f} & (S^2, P_f) \\ \phi \downarrow & & \downarrow \psi \\ (S^2, P_g) & \xrightarrow{g} & (S^2, P_g) \end{array}$$

定義 コンパクト集合 $J \subset S^2$ が postcritically finite branched covering f の Julia 集合であるとは、 f と Thurston 同値な g が存在して、次をみたすことである。

(1) $g^{-1}(J) = J = g(J)$ 。

(2) $S^2 - P_g^F$ 上に完備な metric が存在して、 g は拡大写像になっている。正確に言うと、 $S^2 - P_g^F$ 内の arc l を metric で測った長さを $|l|$ と書くことにすると $c > 0, \lambda < 1$ があって $g^{-k}(l)$ の各連結成分 l_i の長さは $|l_i| < c\lambda^k |l|$ となる。

(3) P_g^F の点は J に含まれない。

f が有理関数であれば、普通の Julia 集合は、上の意味でも Julia 集合になっている。

簡単のため、以後は、 f が Julia 集合を持つと言ったとき、 f が上記の g の性質を満たすものとする。

次のような自然な問題について考察する。

問題 1 Julia 集合はどのような集合になるか。

問題 2 f はいつ Julia 集合を持つか。

2 Julia 集合のトポロジー

この節では、Julia 集合 J を持つような f を考える。 f の次数を $d \geq 2$ とする。 J の構造を調べるため、われわれのよく知っている記号力学系を経由して記述してみよう。

$S^2 - P_f$ 内に点 x をとる。 $\{x_1, x_2, \dots, x_d\}$ を x の d 個の逆像とする。 x と x_i を結ぶ arc をひとつずつ固定し、 l_i ($i = 1, 2, \dots, d$) と書く。

S^2 内の点 y と x を結ぶ arc γ をとる。 γ のもちあげ γ_i を、 x_i と $f^{-1}(y)$ のひとつの点を結ぶ arc で、 $f(\gamma_i) = \gamma$ となるものとする。また、 $L_i(\gamma)$ を l_i と γ_i をつないだ arc とする。 $L_i(\gamma)$ は x を始点とし、 x_i を通り、 $f^{-1}(y)$ の点を終点とする arc となる。

$W_k = \{1, 2, \dots, d\}^k$ の元 $a_1 a_2 \dots a_k$ に対し、 $l_{a_1 a_2 \dots a_k} = L_{a_1}(l_{a_2 \dots a_k})$ と帰納的に定義する。 $l_{a_1 a_2 \dots a_k}$ は x を始点とし、 $f^{-k}(x)$ の点を終点とする arc になる。 $l_{a_1 a_2 \dots a_k}$ の終点を $x_{a_1 a_2 \dots a_k}$ と書く。

(Σ, σ) を記号力学系とする。すなわち、 $\Sigma = \{1, 2, \dots, d\}^{\mathbb{N}}$ で $\sigma(a_1 a_2 \dots) = a_2 \dots$ 。 Σ の元 $\underline{a} = a_1 a_2 \dots$ に対して、 $x_{\underline{a}} = \lim_{k \rightarrow \infty} x_{a_1 a_2 \dots a_k}$ および $l_{\underline{a}} = \bigcup_{k=1}^{\infty} l_{a_1 a_2 \dots a_k}$ と定義する。この極限の存在は、 f の拡大性から保証される。

この Σ から S^2 への写像 $\underline{a} \mapsto x_{\underline{a}}$ を π と書くことにすると、また拡大性より π は連続であり、 $\sigma \circ \pi = \pi \circ f$ であること、 x と l_i の連続移動で π は変わらないことがわかる。

特に、 x を J 内にとると、 π の像が J に含まれていることが言える。 J の diameter は有限なので、拡大性から、逆の包含関係も言えて、結局 $J = \pi(\Sigma)$ 。

上の事実を、別な見方で見直してみると次のようになる。

$$\tilde{U} = \left\{ \gamma : [0, 1] \rightarrow S^2 \left| \begin{array}{l} \gamma(0) = x, \\ \gamma \text{ は連続, } \gamma(t) \in S^2 - P_f \quad (0 < t < 1), \\ \gamma(1) \in S^2 - P_f^F \end{array} \right. \right\}$$

とし、

$$U = \tilde{U} / \sim$$

とおく。ここで、 $\gamma \sim \gamma'$ は、端点を止めて $S^2 - P_f$ 内で homotopic を意味する。 U は $S^2 - P_f^F$ 上の metric から決まる距離によって距離空間になる。

U からそれ自身への写像 F_1, F_2, \dots, F_d を

$$F_i([\gamma]) = [L_i(\gamma)]$$

で定義する。ここで、 $[\gamma]$ は γ の同値類。すると、 F_i は U 上の縮小写像になり、 $\{F_i\}_{i=1}^d$ から決まる自己相似集合 K が存在する。 $\rho: U \rightarrow S^2$ を $\rho([\gamma]) = \gamma(1)$ で決まる写像とすると、 $F_i \circ \rho \circ f = \rho$ となる。 $K = \{[l_a] | a \in \Sigma\}$ なので、 $J = \rho(K)$ と表わすことができる。

同相の意味で Julia 集合の一意性が成り立つ。したがって、有理関数と Thurston 同値な branched covering は普通の Julia 集合と同相な Julia 集合を持つ。

定理 J, J' が両方とも f の Julia 集合なら、ふたつは同相。

このように、Julia 集合は、記号力学系で code されることがわかったが、標準的な coding というものではなく、最初に選んだ、 x と $f^{-1}(x)$ を結ぶ arc を homotopical な意味で異なるものに変えると、違った coding が得られるということを注意しておく (例 2.0 と 2.1)。

Julia 集合は、記号力学系 Σ で coding されるので、位相的には Σ を同値関係で割った商空間で表わすことができる。 f が多項式と Thurston 同値の場合、kneading sequence と呼ばれる記号列で表現される不変量があって、これが記号列の同値関係を定める。

例 1.0 $f(z) = z^2 + i$ 。critical point は 0 と ∞ 。 $0 \mapsto i \mapsto -1+i \mapsto -i \mapsto -1+i$, $\infty \mapsto \infty$ 。

kneading sequence $k(f) = 1\bar{1}2$ である。ここで $\bar{1}2 = 121212\dots$ である。同値関係を ~ で書くことにすると、

$$w11\bar{1}2 \sim w21\bar{1}2$$

ただし w は任意の有限列。

一般に、次数 2 の多項式 $f(z) = z^2 + c$ で 0 が strictly preperiodic の場合、kneading sequence を $k(f)$ とすると、同値関係は

$$w1k(f) \sim w2k(f)$$

となる。これは、Julia 集合が (topological に) 自己相似集合であることを示している。

例 2.0 $f(z) = z^2 - 1$ 。critical point は 0 と ∞ 。 $0 \mapsto -1 \mapsto 0$, $\infty \mapsto \infty$ 。

$k(f) = \bar{1}*$ 。ここで $*$ は 1 と 2 両方を表わすワイルドカードである。同値関係は、

$$\left\{ \begin{array}{l} \bar{1} \sim \bar{1}2 \\ \bar{1} \sim \bar{2}1 \\ w2\bar{1} \sim w1\bar{1}2 \\ w2\bar{1} \sim w2\bar{2}1 \end{array} \right.$$

ただし w は任意の有限列。

一般に、 $f(z) = z^2 + c$ で 0 が periodic の場合、kneading sequence $k(f) = \overline{k_1 k_2 \dots k_{n-1} *}$ とすると、同値関係は、

$$\left\{ \begin{array}{ll} \overline{\sigma^i(k_1 k_2 \dots k_{n-1} 1)} \sim \overline{\sigma^i(k_1 k_2 \dots k_{n-1} 2)} & (i = 0, 1, \dots, n-1) \\ \overline{w2k_1 k_2 \dots k_{n-1} 1} \sim \overline{w1k_1 k_2 \dots k_{n-1} 2} & \\ \overline{wk'_i \sigma^i(k_1 k_2 \dots k_{n-1} 1)} \sim \overline{wk'_i \sigma^i(k_1 k_2 \dots k_{n-1} 2)} & (i = 1, 2, \dots, n-1) \end{array} \right.$$

である。ただし、 k'_i は k_i が 1 のとき 2、2 のとき 1 を表わす。この場合は、Julia 集合が自己相似集合を有限個の点で同一視した空間になっていることを示している。

さきほど、標準的な coding はないと言ったが、多項式の場合、kneading sequence から決まる coding が標準的な coding と言えるかもしれない。ただし、一般に、kneading sequence から決まる coding を定めるような l_i の選びかたは存在するとは限らない。上であげた例の場合では、Fig. 1 のように l_i をとれば kneading sequence から決まる coding と π から定まる coding は一致する。

一般の有理関数の場合は、このように coding をすっきりと決められるような不変量は見つからない。

例 2.1 Fig. 2 のように l_i を選ぶと、同値関係は

$$\left\{ \begin{array}{lcl} \bar{1} & \sim & \bar{2} \\ \bar{12} & \sim & \bar{21} \\ w1^n \bar{12} & \sim & w1^n \bar{21} \end{array} \quad (n \geq 1) \right.$$

定理 $\underline{a} = a_1 a_2 \dots, \underline{b} = b_1 b_2 \dots \in \Sigma$ が $\pi(\underline{a}) = \pi(\underline{b})$ となる必要十分条件は、 x を始点とし、各 k について終点が共通の arc で長さが有界なもの α_k, β_k ($k = 1, 2, \dots$) が存在して、 $\alpha_{k-1} \cup \beta_{k-1}$ は $L_{a_k}(\alpha_k) \cup L_{b_k}(\beta_k)$ と x を止めて $S^2 - P_f$ 内で homotopic.

注 この定理を使うと、同値関係を具体的に知る方法が得られる。 f からある方法で群とその上の準同形写像を定義して、その不変部分群が同値関係全体を記述していることになるがここでは詳しく述べない。

条件の中に、「長さ有界」という条件が含まれているが、これは metric によらない条件である。「homotopical な長さ」というものをうまく定義してやれば、metric を使わなくても条件を述べることができる。Julia 集合を持たないような branched covering に対しても、 Σ 上の同値関係は形式的に同様に定義できる。ただし、その場合は商空間は、Julia 集合の定義を満たすように球面に埋めこむことができない。

Julia 集合の性質を並べておく。普通の Julia 集合と同じ様な性質を持っていることがわかる。

定理 (1) $z \in J$ に対し、 $\#\pi^{-1}(z) < \infty$ 。

(2) $S^2 - J$ の各連結成分には、critical point の imverse image が含まれる (すなわちある z が成分に含まれて、ある自然数 n により $f^n(z) \in C_f$)。

(3) J は連結。

3 Julia 集合を持つ branched covering

すべての postcritically finite branched covering が Julia 集合を持つわけではない。

定義 $\Gamma = \{\gamma_1, \gamma_2, \dots, \gamma_n\}$ を $S^2 - P_f$ 内の disjoint な simple closed curve の集まりとする。 Γ は次を満たすとき、Levy cycle と言う。

各 γ_i の囲む二つの領域にはそれぞれ、 P_f の点が二つ以上含まれている。 $f^{-1}(\gamma_i)$ の連結成分のなかに、 γ_{i-1} と $S^2 - P_f$ 内で homotopic な γ'_{i-1} があって、 $f: \gamma'_{i-1} \rightarrow \gamma_i$ は degree 1。ただし、 $\gamma_0 = \gamma_n$ と考える。

Levy cycleを持つbranched coveringがJulia集合を持たないことはすぐにわかる。その逆も言えるのではないかというのが次の予想である。

予想 postcritically finite branched coveringがJulia集合を持つこととLevy cycleを持たないことは同値である。

次数2のbranched coveringに対しては、Thurstonなどの結果[1]により、Levy cycleを持たないことと、有理関数にThurston同値であることが知られている。したがって、次数2の場合は上の予想は正しい。次数が3以上の場合、branched coveringが有理関数とThurston同値になる条件はLevy cycleを持たないというだけでは足りない。予想が正しいければ、有理関数と同値ではないがJulia集合を持つbranched coveringが存在することになる。不完全ながら次のような結果が成り立つ。

定理 $P_f^F = \emptyset$ となる postcritically finite branched covering に対し、Julia 集合を持つ必要十分条件は、次の性質を満たす $\{\gamma_1, \gamma_2, \dots, \gamma_n\}$ が存在しないことである。

各 γ_i は端点が P_f に含まれ、内点が $S^2 - P_f$ に含まれる simple arc。 $f^{-1}(\gamma_i)$ の部分集合で γ_{i-1} と端点を止めて $S^2 - P_f$ 内で homotopic な γ'_{i-1} が存在し、 $f: \gamma'_{i-1} \rightarrow \gamma_i$ は 1 対 1 写像。ただし、 $\gamma_0 = \gamma_n$ と考える。

前節の定理とその注で、Julia 集合を持たない場合でも、 Σ 上の同値関係が定義できることを述べた。 Σ をその同値関係で割った商空間を \tilde{J}_f と書いて、 f の pre-Julia 集合と呼ぼう。

予想 f がJulia集合を持つことの必要十分条件は f の pre-Julia 集合 \tilde{J}_f が S^2 に埋めこむことができ、かつ、 f と Thurston 同値な g で $g^{-1}(\tilde{J}_f) = \tilde{J}_f = g(\tilde{J}_f)$ となるものが存在することである。

参考文献

- [1] A. Douady and J. H. Hubbard, A Proof of Thurston's Topological Characterization of Rational Maps, preprint.

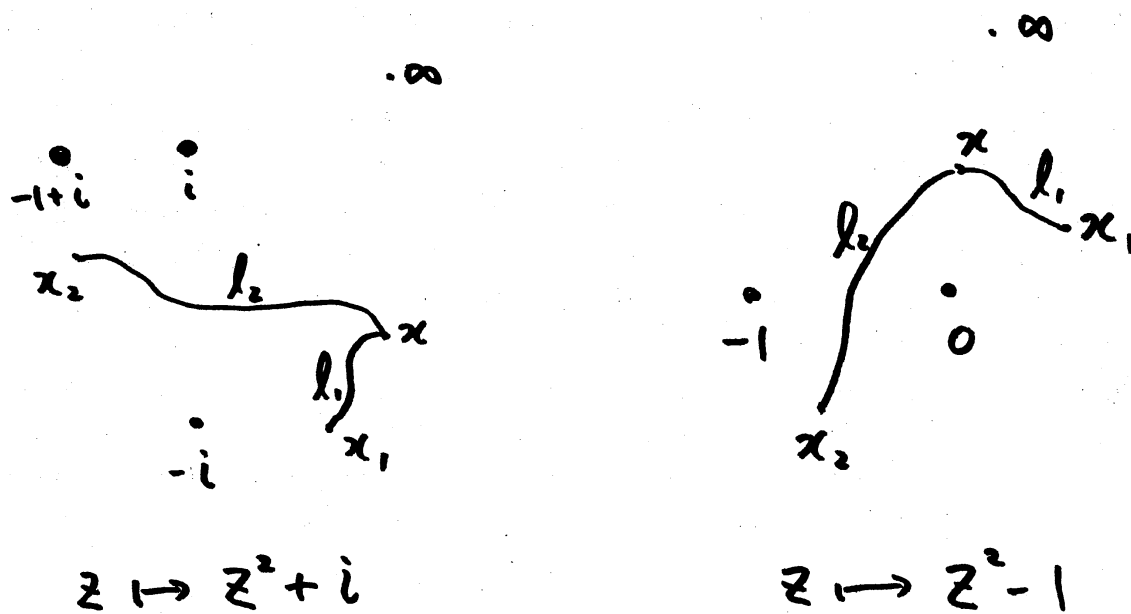


Fig. 1

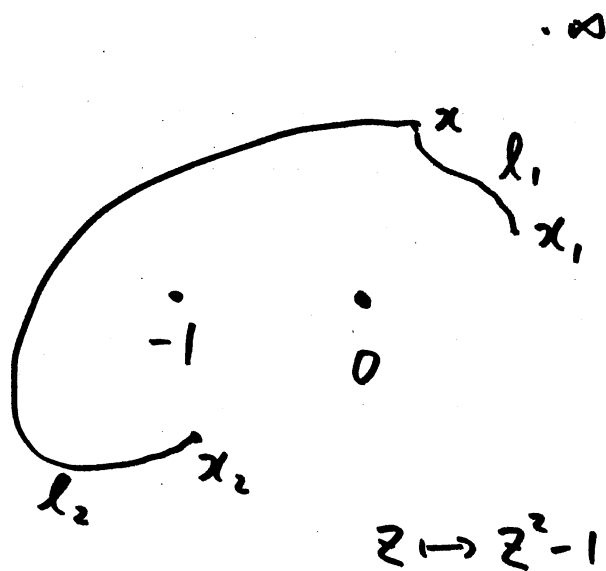


Fig. 2